



GEにブルーオーシャンはあるか

薬事ニュース
野口 一彦

富士製薬工業の武政栄治社長は、平成30年9月期の決算説明会で「ジェネリックだけやっていたのでは市場に生き残れない」と述べ、薬価に依存しない製品などについても検討していく必要性があるとの見解を示した。

今後の薬価制度では、毎年薬価改定が導入され、ジェネリック医薬品薬価についてはいずれ一本化される方向性が示されている。さらにジェネリック医薬品の数量シェア80%への到達が、カウントダウン段階に入った。数量シェア80%以降は、大きな市場成長が望めなくなる「成熟市場」の時代に入る。そこで生き残っていくために、各企業が取っていく戦略によって業界再編が起こるといった見方が多い。ジェネリック医薬品だけでは生き残れないという危機感は、各企業が抱える共通の課題でもあるのだ。

富士製薬は、新薬を含めた「プロダクトミックス」で「ジェネリックだけ」からの脱皮を図ろうとしている。これも有望な戦略の一つだろう。新薬に活路を見出しているのは、なにも富士製薬だけではない。共和薬品工業、大原薬品工業などのほか、新薬からジェネリック医薬品に参入した日本ケミファも、改めて新薬に活路を求めている。自社の得意とする領域で「新薬」と「ジェネリック医薬品」を両方取扱うことで、「スペシャリティファーマ」への道を目指していると言える。

また、東和薬品は一般用医薬品の発毛剤「ミノアップ」の販売を開始した。大正製薬「リアップ」の後発品となる。ミノキシジル（成分名）は、岩城製薬、日本ジェネリックも参入している。東和薬品の吉田逸郎社長は、中期経営計画で健康関連の新規事業を創出する考えを示しており、弊紙インタビューでも「OTCやサプリメントなどは健康維持に必要なものとして視野には入っている」とコメントしている。今後も、さらなるOTCの発売があるかもしれない。

新薬やOTCなどを扱っていくこと自体は、重要な施策であることは間違いない。しかし、既にある市場への参入にすぎないという気もしている。新薬の製薬メーカーでは「モダリティ」がキーワードとなっている。細胞医療や遺伝子治療、ペプチド医薬など、化合物や抗体医薬の先を行く技術の開発を進めている。今までにない新たな市場の掘り起こしを模索しているのだ。だからといって、ジェネリックにそれを求めるのはお門違いというのは当然だ。そもそも「ジェネリック」は新薬の特許が切れたものを指すのだから、「新たな市場」「ブルーオーシャン」などないというのが、当然の指摘である。でも、



本当にそうなのだろうか。AIやIoTの進化、医療のビッグデータ化など、医療や健康を取り巻く環境が大きく変化しているのはもちろん、ジェネリック製薬企業も高い製剤技術やノウハウを蓄積している。私にアイデアがあるわけではないのだが、どこかに「ブルーオーシャン」があるような気が、なんとなくしている。それを見つけたところが独り勝ちする、そんな気がするのだが、期待のしすぎだろうか。